

治療に際して統合失調症の患者との 人間同士の心の触れ合いが大切

「互いに活かしかつ活かされる社会」に向けての動きが緩慢な時の、本著の出版は価値ある

池上眞平

尾関夢子・尾関周二 著
▶ ころの病は人生もよう
統合失調症・ユング・人類精神史
3・22刊 A5判214頁 本体1819円
本の泉社

折角 21.5.22



京都の鴨沂高校時代の同級生の尾関夢子さんから表記の著書出版のお知らせを頂戴し、その時に「社会に未だに存在する統合失調症に対する偏見をなくしたい」との彼女の想いが著書に籠められているのを知り、共感を覚えると同時に、NPOハート・アーツおやか代表の田野智子さんとの十数年前の出会いを思い出した。

このNPOに所属するアーティスト達は、「絵画や工作のワークショップにより、言葉によるコミュニケーションが苦手な子供達が持つ高いポテンシャルを引き出し、かつ彼らの心を徐々に開く」ことを目的とする活動を展開していた。総社市にある小生の生家は空き家だったので、これを彼らの活動に活用して貰っていた。「彼らの素晴らしい作品とワークショップの様子に触れた時の驚き」、「NPOの方々の真摯な活動への取組みに対する感服」、そして「この子供達を障害者と見做すべきでないとの私の気持ち」を鮮明に覚えている。

書評の依頼を受けた時、門外漢の私には無理だとまず思った。しかし、この分野は沢山の専門分野の交差点になっているので、門外漢による書

心に蘇り、本著と私の心の距離が更に小さくなったと感じた。「互いに活かしかつ活かされる社会」に向けての動きが緩慢な時の、本著の出版は価値あると思う。

「人間の脳の特徴の一つが幻覚や妄想にある」との仮説に、私は以前より興味を持っていた。例えば「睡眠中の夢は幻覚や妄想の一種」と見做せるような気がする。「睡眠が浅く朦朧とした時に画期的なアイデアが出るので、枕元に鉛筆と千用紙を置いておいて、学者の発想」を子供の頃に聞いたことがある。睡眠中に湧き出たアイデアの多くは、目覚めと共に消え去ることへの対策だ。たのびはと思う

(参照:「The Tides of Mind」、著者のD.Gelmanは「ニュータ科学者だ、心理学も勉強」。右記の現象に照らした「覚醒時に幻覚や幻覚を覚えるために統合失調症と診断されている人達の優れた才能」の科学的な解明は、価値ある挑戦だと思ふ。それから、約1000億個の細胞が約100兆の動的な繋がり形成している脳のシステムを形成している脳はワックワックする挑戦なので、人類の英知の結集により、研究・技術倫理を遵守しながら一歩ずつ解明が前進するのを期待している(参照:「一流の頭脳」、著者のA.Hansenは神経科学者)。

本著は、長期間を要する幻聴や幻覚の科学的解明とは別のアプローチを示唆していると感じた。「覚醒時に現れる幻聴や幻覚」を病と診断された人達は、強いプレッシャーを感じ続け、精神的な負のスパイラルに陥った結果、「優れた才能を活かす機会を逃し」、かつ「自分自身を見失ってしまふ状態に追い込まれる」のでは、私は危惧する。この余計なプレッシャーからの解放により救われる人達が増えるのではと思う。

私が出会ったNPOの方々、活動の様子は、私の期待の裏付けの一つかも知れない。この課題の根本解決には「多様な生物が共生する雑木林型の社会の構築」を要すると考える。しかし、この課題達成には「人間の性」、「社会の文化」や「教育の質」などの多様な要素が絡むために、複数世代を跨ぐ粘り強い努力を要するのを実感する必要があるが――。

一方、我々が個人的に実行できることがあることも忘れてはならないと思う。例えば「散歩などの適度な運動」、「好奇心の維持」や「多様な人達との交流」などは、悪いプレッシャー軽減に繋がると感じている。右記のような「個人的な心掛けを引き起こす小さな波が重なることにより形成される大きなうねり」が、社会の進化にも繋がると可能性を感じたい。

「著実に社会に浸透している」とは言い難い多様性、「蔓延し続ける人々の不安を煽るビジネス」、「増し続ける1人1人の進歩による人々に対するストレス」などに対して私は心地悪さを感じている。私と同様の方々が多く居られると推察する。本著は「原点に立ち戻って自身の生き方を再考する機会」も私に与えてくれた。「著者の熱い想い」に触れることを積極に推奨したい。

(元富士フィルム取締役・研究開発担当)